



史學童觀抄

三篇
上

リ伊5
4051
6-5



門 伊 5
號 4051
卷 6-5

市川清流先生述
松本楓湖先生画

史 學

武家童觀抄

一名日本外史註解
從吾所好齋藏板



人皇三十一代

敏達天皇

諱淳中倉大珠敷
尊壬辰并即位
在位十四年崩于天
殿

坂大覺王子

高仁親王

橘諸兄

橘者實副華副

其葉副枝爾雅

爾降彌常器榼

伊孫四位 式部

從一位左大臣
号平手

諸方

正方

諸清

正恒 左中將

經基 權中將

正基

清文 左大將

清康

成行 左少將

葛城王ふ始て姓
橘氏と賜ふ



史學童觀抄卷五

新田氏前記

楠氏

楠氏本姓橘氏人皇三十一代敏達天皇より出天皇の曾孫を諸兄
との左大臣と為姓を橘と賜後裔或は降て民間にあり其河
内は居者楠を以氏とす始て後醍醐天皇の時著るとり天
皇以後鳥羽の玄孫と為後鳥羽の二子順徳土御門二帝並北
條氏は徙さんて崩ト給ふ後嵯峨帝土御門の皇子を以北條
氏に立させんての常先帝の蒙塵を痛ませぬひ時を俟
て之を報んと欲す而後深草龜山相繼て位に即ちる皆帝の



御子なり帝後深草優柔は龜山英氣なり其志を継
 承し故に遺詔して龜山の後永く皇統を兼べしと故
 後宇多龜山の太子を以て立て位に即ち北條氏後深草の皇子
 を立又其皇孫を立其後を承しむ後宇多上皇大納言藤原
 定房を遣り其再び遺詔に違ふを責乃上皇の皇子を立實
 後二條帝遂は兩統更立の議を定帝崩れぬ及又後伏
 見の弟を立時後宇多の次子尊治幼く英質あり龜山
 上皇之を奇とて定房を遣り北條氏に諭して之を立是を後醍
 醐天皇と申奉る此時に當て北條高時政を失ひ其家宰長
 崎高資等権を恣り將士心を離背叛の者多し天皇陰に

是時に乗之を討滅せんと謀のひ乃精を勵治を求記録所定評
 所より後三條帝のを置親訟訴を聴せぬ大納言藤原資朝
 御時より起り右少辨源俊基等と謀豪傑を延置酒款語し禮節を破驩心
 を結目して無礼講といひ美濃人土岐頼兼多治見國長與より
 頼兼の族頼春齋藤利行の女を娶り利行は六波羅府の吏なり
 一夕頼春偶妻と語て其事を告ぐ妻走て其父を告るより六
 波羅府より兵を發し頼兼國長を襲ふ二人力闘して自殺す高
 時之を聞兵を遣り来て資朝俊基を執ふ帝因て誓書を賜
 事寢を得乃俊基を釋し資朝を流し而志益銳皇子護良
 と謀り南都叡山の僧徒に結ぶ高時覺て僧圓觀等を捕へ

再び俊基を執へ遂は高資と議を定め帝を廢し承久の故
 事の如くせんと欲し二階堂貞藤を遣兵を潛て西上一夜
 六波羅入府將北條仲時北條時益高時の書を得ん未封を
 發せざるは帝謀ひ知り乃護良の計を用ひ逃て南都は之大
 約言藤原師賢をく詐て帝と稱し叡山は赴し僧徒大は
 喜び来り聚る一夕萬人を得たり而も仲時時益帝猶宮中
 在と謂ひ兵を遣て之を索るは獲ば則大約言藤原宣房等
 の四人を收て去り萬人を以て叡山を攻護良等撃て之を卻而
 僧徒帝の真は非るを知り悉く散去是時又當て帝笠置山
 在り仲時時益兵を遣て来り攻未だ至らざるは帝詔を四

方は下難は赴かむ命は應する者無し帝憂迫適夢は
 紫宸殿の南は大樹あり樹下虚位を設く二童子来り白く
 曰天下地の陛下を容る無し獨此座ありの事と既覺て念ひ
 たるは文木南は従あり楠たり當は姓楠の人あり出て朕を扶々
 以て禍難を定べしと山僧を召て之は訪て曰地方の豪傑は姓
 楠なる者有乎對て曰金剛山の西は楠正成なる者ありその母
 志貴山は祈て生む志貴山 大和河内の界はうり 少字多門長し 毘沙門天を安し
 て材武を以て名あり嘗て土寇を平け功を以て兵衛尉とある
 帝曰是なりと中納言藤原藤房を使け往て之を召し正
 成即意を決し之は赴く帝藤房をく言めて曰賊を討の事

朕一以汝托すと因て坐を命とて計を問ふ正成感激一對
 て曰天誅時に乗を何の賊を斃まさん東夷勇有て智無一
 如一勇を較け六十州の兵を擧るも武相は足るは智を較べ則
 臣策あり然とも勝敗は常なり少く挫折するを以て其志を
 変はべうは陛下苟も正成が未だ死せざるを聞ば則復宸慮
 を勞せき分のふなり乃拜辞して還實は元弘元年八月廿日
 正成赤坂の城を赤坂城
河内國石川郡は向高東方三十二丈北方
 四十三丈南は山は連り前は溪流あり
 將を以て乘輿を奉せんは而して賊兵已に行在を圍む參河の
 人足助重範善拒ぐ備後人櫻山茲俊兵を起して之は應を高
 時乃北條貞直足利高氏等六十三將を遣武相等五州の兵

十餘萬騎を以て西上す未至るばる笠置陷り重範擒せられ
 錦織俊政石川義純之は死す帝藤房と神器を奉して逃る
 貞直等の諸軍徑は赤坂城を赴く城纒み成農粟を取りて
 糧を充兵僅は五百人正成三百を分弟正季族和田正遠を以
 之は將とし城を出山は草草
字書は草藏と通は藤漢韓信
 傳は間道は從は山は草
 趙軍を望む注は山間は藏隠し東軍を俟東軍至り其城を望む
 敵を以て見せざるも有
 方百餘歩を乃憫笑して曰此隻手掀すべしと争は馬より
 下り肉薄して之を改正成士率を以て齊射せし立は千餘人を
 斃す東兵沮卻し甲を卸し且息とするは伏兵左右より起り
 正成二百騎を以て門を闢て突出三面合撃す東軍大に驚き

擾乱一器械を棄て走且日東軍今二と為一ハ伏し備一ハ城を
圍む正成豫め復垣を築繩を以て外垣を懸敵蟻附す乃繩を断
は敵垣と俱に墜乃大石巨材を投七百餘人を殺す居四五日東
軍攻具を修し楯を蒙り進み鐵鈎垣を鈎す垣殆ど崩正成
城兵をくく人ごごよ長柄杓を執沸湯を沃ぐむ敵焦爛して退
東兵是に於て營を築き城を環て持久の計を為す而城内五
日の食を餘正成衆は謂く曰吾天下に先大事を擧固より生を
圖む然ども天子在吾未以死を去る吾今佯死せし敵則去ん去ハ
則復起り彼をくく奔命は疲れん是軀を全し敵を亡の術なりと
衆曰善乃坑を鑿尸を填薪を以て之を蔽風雨を乘りて夜稍々逃

出金剛山一人を留誠と曰我遠を度火を擧よと火起敵争て
城に上坑中の積尸を見正成既死せり兵を引て東去湯淺定
佛きて代て其城を守しむ櫻山氏の兵之を聞て潰散し茲俊自殺す
賊帝と宇治の執へ平等院に奉遂に六波羅に徙んと欲帝行幸
の儀を備め乃往賊乃後伏見帝の子量仁を立て位に即實光
嚴帝帝の神器を傳人を請聽む帝の髪を削を請又聽す毎且
沐浴して皇祖を拜る常礼の如賊之を畏憚す僧良忠帝を奪と
謀る成は二年二月高時帝を隱岐に徙其礼兼久に比せられ頗る
厚し參議源忠顯嫡藤原氏従ふ而賊將佐々木高氏等兵三千
を以護送一山陽道よりす兒嶋高德又之を奪を謀復成す

兒嶋氏

宇多源氏佐々木三郎盛綱七代孫本三宅氏祖先より代々備前の兒嶋を領す 本三宅氏世備前兒

嶋に居る兒嶋範長なる者備後守とある子高德備後三郎と

稱す帝の笠置に在すや範長高德赴援んと欲す笠置陷いり

楠氏敗るを聞乃止已り帝の西遷を聞高德衆に謂て曰く

吾聞志士仁人を身を殺して仁を成す義を見くせざるは勇

無きなり蓋ど要して駕を奪ひ以て義を擧さると衆奮て

之に従ひ舟坂山に伏して待久し至る人遣て之を候ふ曰く

駕山陰道に向ふと乃間道杉坂に至れば則ち已に過衆乃散去

高德悵恨去る能はば乃服を変て駕を尾に一行たひ帝を見て

言とらふ有んと欲す而く間を得ば是に於て夜帝館に入り櫻

樹を白く之を書くと曰く天莫空勾踐時非無范象此二句言ハ昔

世は呉の國と越の國と合戦あり越軍敗る越王勾踐擒とけり吳國

は囚せらるる有るは越國の大忠臣范蠡身を魚商とやつ牢辺は排徊

一詩を唇して魚腹に藏し牢中に投入る其詩は曰西伯囚羨里

重耳走翟皆以爲王霸莫死許敵とはは西伯も重耳も初は種々難難に遇

を許さんれとや越王後吳國の囚を免さん復軍を起して遂に吳國を滅

したり今高德も亦其意を取て時節を御侍ありせりべ一當時又范蠡のこ

とき君を思ふ者無しとや此十字中深き意を籠て帝の御心を慰

奉り一日護兵聚り視て讀くと能はば乃之を奏す帝之を

熟視し給ひ欣然として御心は王は勤する者ありと知りぬるあり

なり帝隱岐に至り國府島に居る高時遙に隱岐乃守護

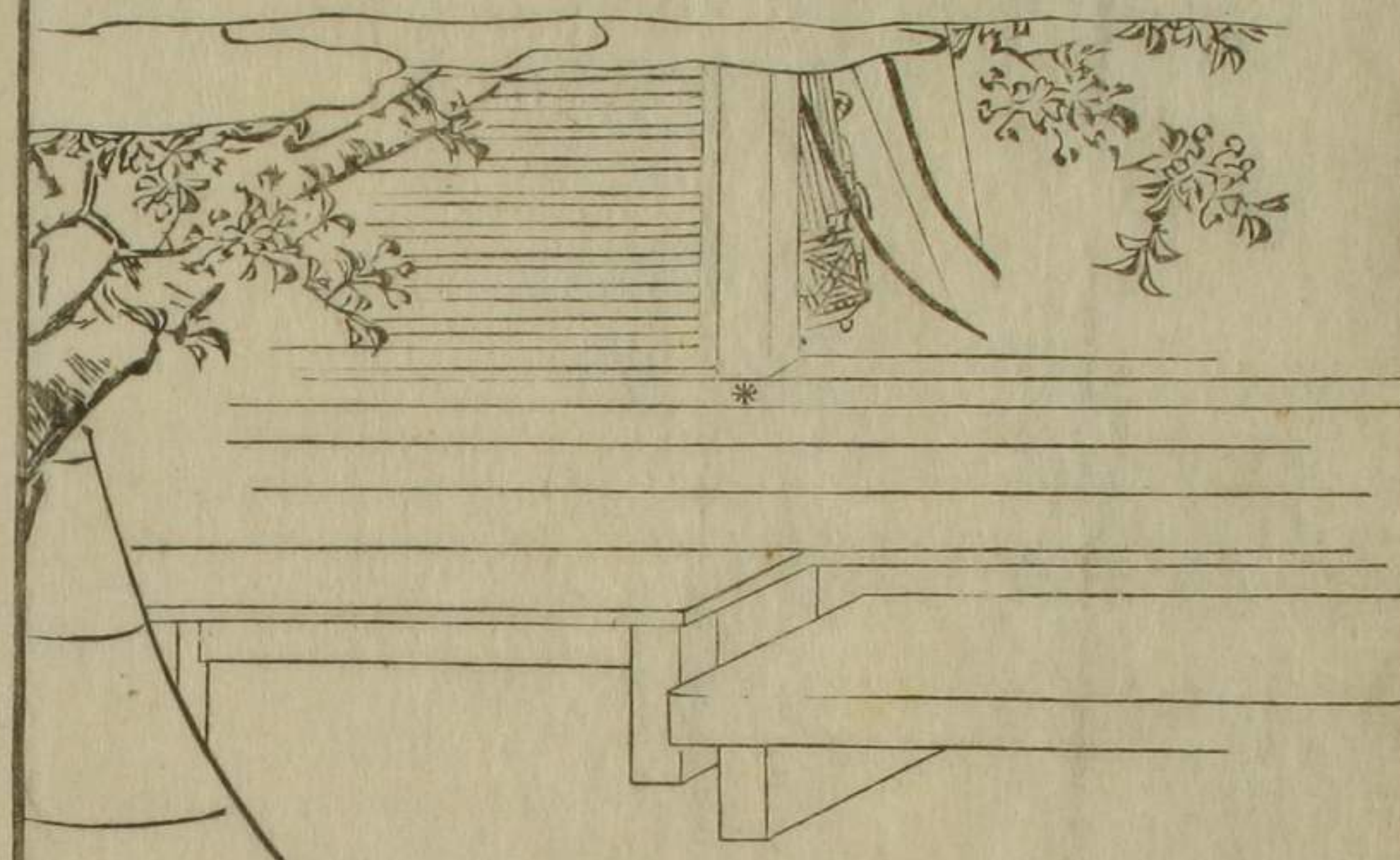
佐々木清高に令し兵を將ぬて監護し又藤房以下公卿六人を

流し藤原俊基等四人を殺す藤原資朝佐渡あり其子國光

世説新語

下

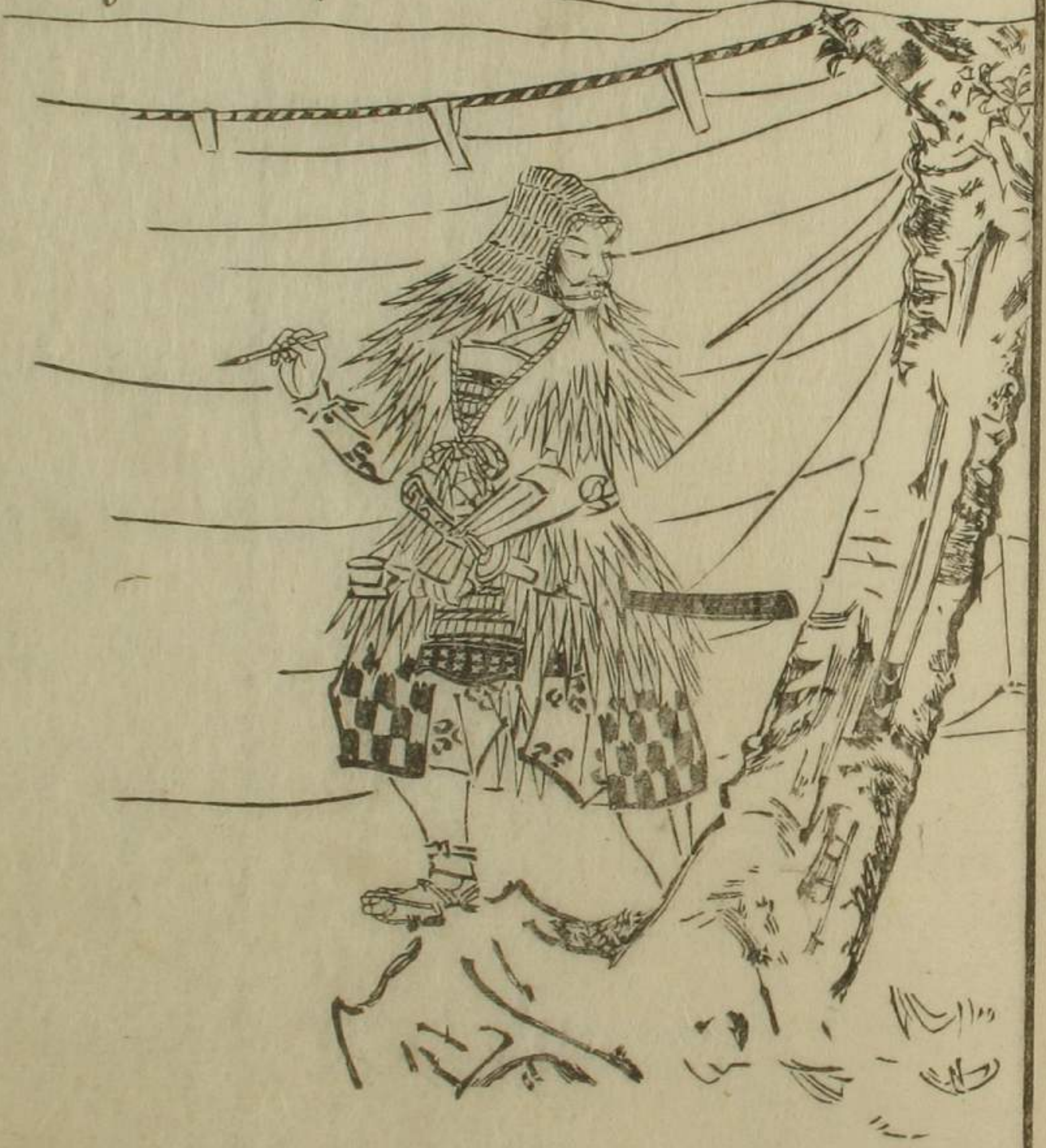
高德 櫻樹 断 詩 題



天步艱難之日
潜候欲奪龍蹕
白庭樹書小詩
獨自有帝心知

松苗

知紀
櫻樹
断
詩
題



京師より赴き父を省す父己は本間三郎を殺さる國光夜三郎を
斬て去る高時又皇子尊良宗良恒良を流し恒性を殺す獨
弟三子兵部卿護良逃れて吉野を奔る是に於て四方復王
勤するの師を四月正成金剛山を出五百騎を以て赤坂城を
攻城將湯淺定佛糧を紀伊に徵す正成遮て之を奪ひ其苞
甲を充三百人を以て荷て城下に至り別兵を分て之を追ふ
城兵望見て敵我糧を奪ふと謂ひ門を開て之を納る三百人苞
中の甲と出て探し内喊起鬪ふ正成門を奪ひて入定佛為す所
を知らば乃降る正成其兵を并せ七百騎を以て河泉に徇ふ悉く之
を下す渡部及ふ比二千人を得進て天王寺に陣す北條氏天子

を徙てより天下復虞不足なりと謂ふ正成起る及び大驚き
六波羅の二帥隅田通倫高橋宗康五千騎を將ひ之を撃つ正成
兵を分て四隊とす其三を伏せ羸兵一隊を以て渡部の橋を扼し
て陣す敵望見て之を易輒ち競ひ渡羸兵佯り走る敵北と追
天王寺を過伏し陥り急兵を麾て却り我兵疾撃て之に乗を敵
兵卻走橋を争ふて溺る者無數京師之が為に謡て曰渡部川橋
隊田決二帥之を愧ぢ更に宇都宮公綱に命て紀清兩黨紀清
紀清原氏の兩黨を野州に五百騎を以て代り赴く正成の族和田
あり此兩氏の勢をいふ 五百騎を以て代り赴く正成の族和田
某逆へ戦んを請曰我已は五千に勝何と五百に於てをや正成曰
勝敗の機を衆寡より公綱素より勇名を負ふ寡兵を以

史記 卷五

敗を承其將士心を死に同する知べき也我饒之一克も能夫て無
んや吾大任を受前途甚速一首我士を傷む後誰我用を
為さん吾將は戦へもて之を屈せんといと遂に營を抜て公綱
代り營に既夜を四面を望む皆炬火漸多漸近乃
甲を釋ばし待との三晝夜兩黨懼れて飯と請ひ曰楠氏兵日
よ加り也と公綱乃引飯る正成復天王寺軍數出て兵を輝
軍中よ令て鹵掠を禁は遠近心を飯來り属する者多し正成
威京畿は振ふ寺舊上宮太子の識文を蔵す正成僧は請て之を發
視其文は曰人皇九十五代は當て天下一乱而主安かば此時東魚來
て四海を吞日西天は没する三百七十日西鳥來て東魚を食ふ海内

一は飯三年獼猴の如き者天下を掠むる三十餘年大凶變して
一元は飯す正成指て衆ふ諭して曰謂ゆる九十五代は今上は非
ばや東魚は乃高時而して西鳥は食ける則終に族滅は飯せ
んのと日西天は没す三百七十日上の復辟蓋し明春は在諸君
之を助よと衆皆奮厲す是時當て皇子護良兵を起し
て吉野は據八月赤松則村兵を播磨は起す是は於て京畿警言
聞交録倉に至る高時乃東北三道は檄し大は兵を發し子の時
治族高直大臣貞藤を以て之を將とし宰高資馬を監し西正
成等を撃つ正成金剛山の千窟は城く千窟城
河内國石川郡金剛
山の坤あり高東
百一丈餘南八十四丈餘西八十一丈北三十五丈長百
七丈餘城中秘水あり毎日三斛六斗を汲で盛むと云城山を挾と壑を帶

周田一里高數百仞中五泉あり旱すと雖涸ば槽を造り之を蓄
 養ふ黃土を以ては雨則屋溜を槽に引又別將を以て赤坂を守ら
 しむ而自ら金剛山に徙る三年二月東兵三道より上り今て三
 軍と為し金剛山及吉野赤坂を攻赤坂の城兵力拒し殺傷過
 當賊其水道を絶城遂に陷る吉野圍を受る七日乃に陷る是に於
 て關東の三軍皆金剛山に萃る而して西南諸道の兵高時の
 徵に應ずる者亦會し八十萬と稱す勢を合て正成を改正成千
 餘人を以て之を拒ぐ賊兵四面仰ぎ攻呼聲天地を動かし正成士
 卒とて大石を投隨て之を乱射す復虚箭無し軍監高資
 十二史とて死傷を記せしむるは三晝夜筆を閣ば乃諸軍を冷

復城に薄る勿くは賊火箭を以て城を射正成機を以て水を注
 ぎ焚能はざりしむ賊將高直議しを曰叢尔る山巔水有るは
 夜に乘りて出汲は非るを得んや前より赤坂を攻水を絶て克此計
 襲るも也と名越某を以て三千人を將而東溪に柵守す久しして
 出汲もの無し正成其倦怠を暇ひ夜兵を出し撃て之を走らし
 其機を奪ふて還る旦日之を壁上の樹呼て曰此名越公の贈る所
 公の徽号あり我に用無し願は之を奉還せんと名越慚志族を擧
 げて城に薄る城上豫免大水を懸敵の薄るを及んで之を發す因て
 射て四千餘人を斃す賊益畏憚り戦を休長圍を築て環守す
 城兵之に困す正成乃藁人數十を作り甲冑を被夜城下に列ね

兵を其後、伏曉霧に乗、大関す賊相告て曰、城兵窮蹙して出
戦ふ也。と舉軍競ひ進む我兵矢を発、輒退く。城に入り、敵蒙人
集る、則巨石已、其頭を碎き、立、五百餘人を死す。賊敢て復城
薄、三月高時使者を遣り、諸將を督促し、進攻し、諸將合
議し、工を命、ト雲梯を造る、長二十丈、輕、跨り壁、架、銳兵六
千、縁て城、乘んと欲す。正成、冷して、大炬を投、唧筒油を注ぎ、以
雲梯を焼、烟燄噴起す。賊兵前後喧騰す。梯遂に中斷し、輕
陥り、焚死する者數千人。諸道豪傑、正成の風を望み、官軍に應ず
る者多し。護良、又大和の土寇を命、敵の糧道を絶、敵兵逃亡、
敵中新田義貞あり、護良の令を請、疾を称し、東飯、鎌倉を攻

んと謀る。是に於て六波羅の二帥、又宇都宮公綱を遣り、千餘
人を以て来り、援け急、攻て柵を拔、城趾を鑿す。正成、機に應
之を拒、敵竟に拔く、能はば。北條氏天下王に勤する者多き
を以て、帝の逃れ出んを慮り、佐々木清高を戒て、益防備を嚴
し、而も清高の族、義綱中門を守る、竊に帝を脱せんと謀る。
未だ敢て發せば、一夕、宮女帝旨を傳へ、酒を守兵に賜ふ。義綱
白く、曰く、上未だ聞、い、ぬ、ぬ、や、捕正成、金剛山に據、義兵を
舉げ、高時百萬の兵を以て之を攻、殆ど百日、拔、張、は、播磨備前
伊豫の將士、並び起て之に應、ト或も駕を迎んを謀り、或い京
師を窺ふ。是皇運將、面ふんとする、秋、を、而して、聞、高時

兇懼陰ひそか不良ふりやうを謀まると上宜かみく急きまく千波港せんぱこうに艦せんくを雲伯うんぱくの
 間まに幸しあしめ之これ臣しん佯やうり追おはさす之これに従したがはん事こと必かなくは濟あんと帝てい輒あく
 信しんトおけん因よて其その宮女みやうにょを賜たまふて以もて之これを察さはし義綱ぎこう志益しやく固かく
 帝てい乃すな先出ま雲うに往ゆて其その族人そくじんを誘まひ来迎きたむかへし義綱ぎこう往ゆて族鹽そくえん治ち
 高貞たかまに拘留くわうりうせし久ひさしして返からざるを以もて遂つひに意いを決けして
 夜偽よるいつはりく嬪御ひんぎよと称なし源忠顯げんちゅうけんと徒行とどして逃にれ出でるひ一民家いっしんかを叩たた
 き港こうのある所ところを問とふ主人しゅじん帝ていの状貌じやうぼうを熟視じやくしし常人じやうじんに非あらざるを知し
 り乃帝すなを負おして港こうに至いたり舟人しゅうじんに託たくす舟人しゅうじん亦また感喜かんきの色いろあり忠顯ちゅうけん
 實じつを以もて告つげ帆はんを揚あげて南みなへ天明ていめい願ねがはれは數十艘すうじふさうを見みる近ちかけ
 則すな清高しやうかうなり舟人しゅうじん帝ていと忠顯ちゅうけんと船底せんていに伏ふし免まるる鯨魚きんぎょを以もて覆おひ

其上そのかみに坐ます 鯨きんぎょ 字各ある鯨きんぎょの俗字しやくじ乾魚けんぎょ腊也らつとあり太平たいへい清高しやうかう来きり

索さくむ舟人しゅうじん曰いく何なにをか索さくむ曰いく先帝せんてい逃にる舟人しゅうじん曰いく果はたしそ是事このことあり
 嚮むかへ京装けいさうの者もの二人ふたり船ふねに乘のり港こうを發はせり因よて指さして曰いく彼かれに有あり
 と清高しやうかう之これに赴おもむく帝てい遂つひに名和港なわこうに達たち名和氏なわうぢに依より

名和氏

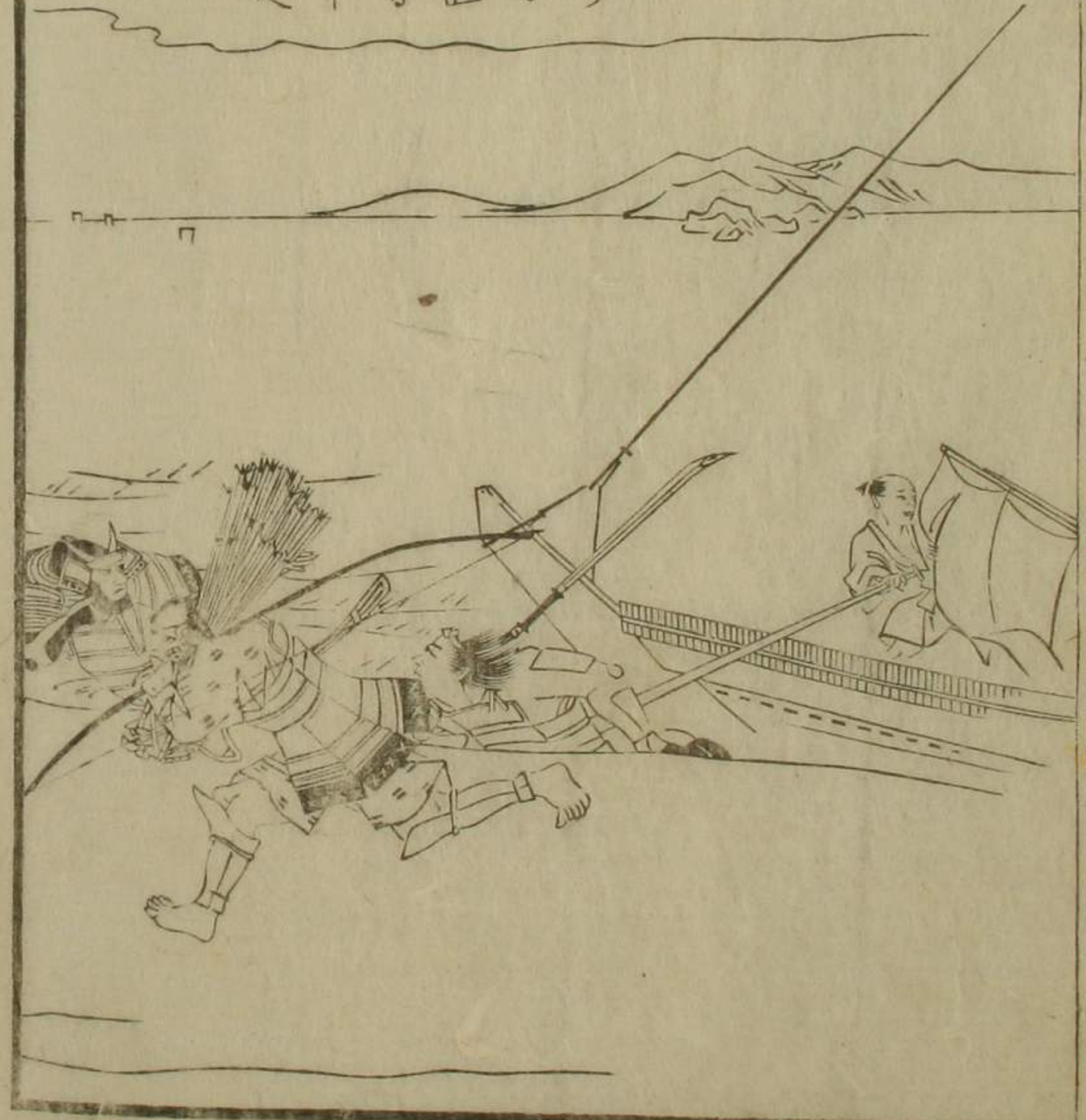
本村上氏世伯耆の名和と居る承久の役名和行秋ある者あり
 孫行高と官軍に從ふ事敗れ邑を奪はる行高四子長高長重
 長生氏高皆武幹あり帝名和の港に至り忠頭を以て岸に登り
 塗人の豪族倚る者を問む答るる長高を以て忠頭乃其家
 踵る家方より宴す忠頭直に入詔を傳ふ長高未だ答ざる長重進
 む曰人の重する所は名のみ今忝帝者の自托を受く成否と無く皆
 以大名を天下に揚ふ足と長高乃意を決し帝を船上山に奉せん
 を計長重等五人を以て甲を擲し走に帝を迎へむ御舟の傍に
 跪く帝欣然長重薦を甲背に被帝を負山より上り木葉を藉て食

を進長高倉粟を山に移さんと欲し村民を募り一日五千餘石を
 致は乃盡く其宅を焼百五十騎を率ゐて行在を獲る樹に因て
 柵を植扉を列て垣とす長高布旗數百を造近國諸豪の章識
 を煤印し之を山上に張明日清高兵三千を以山の前夜より來り攻
 旗章を望見敢て進む我兵林を蔽し射る射て一將を殺す敵
 八百騎乃來り降る清高山後を在て未だ之を知らば兵を更て急
 む夜日且に入んる會大雷雨す長重長生乘し疾撃賊を谷
 に擠く千餘人を虜殺す清高單舸逃れ去帝長高は左衛門尉
 を授伯耆守を兼し名を長年と賜ふ子弟官に拜する差あり義綱
 高貞千餘騎を以至る山陰山陽の豪族來り屬す數十姓而兒嶋

後醍醐天皇名和
長年小下ー給ふ
勅書節録

全文載扶桑拾葉集

漫々たる海上よつとも
あつたよひに四日たり
八過ぬ二十七日の夕方
まや杵築の浦より西
風まけり吹くりか
べんべん心さしぬせ
かき風よまかせる女
より海上まろくも明
ぬもいさかきもぬ
は泊者の湊に着ぬ



コトヤシヨリヤ
アノミの
何れも
舟中のよ
長年忠功後
代の人も知ら
めん為志
ねりり云々



高徳備前より進帝高徳等をして源忠頭より従ひ六波羅を攻
 む長年の子義高初高時の徴より應へ金剛山を圍む長年官軍
 より應ずると聞板飯り亦忠頭より従ふ忠頭行兵を収三萬人を得たり
 但馬の守護太田守延皇子恒良を擁へ来り會す兵を合峯の堂
 軍す僧良忠男山軍赤松則村山崎軍皆護良の令を
 奉じ叡山の僧徒と約し將より力を戮京師より入んとす而忠頭功を專よ
 せん欲し獨進で敗走す守延之より死す高徳義高留て力戦す
 忠頭峯の堂に在て恒法安くも軍を卻け敵を避と欲使を使し
 高徳等を召還せしむ高徳切に諫て之を止自三百騎を以七條橋を
 守り敵の夜襲より備ふ夜半峯の堂を顧べ炬火稍燿乃恠て還る

丹後の人荻野朝忠曰大將逃たりと高徳往て其營を視バ錦幟
 地に仆れ鎧装狼藉高徳錦幟を取朝忠より追及び潰兵を救め
 高山寺を守る高時金剛山久く拔ざるより足利高氏北條高
 家を遣り助攻萬騎を率て京師に至る忠頭則村高家を破り
 殺す高氏家聲素著新帝の密旨を得行在を犯さんと欲意
 兩端を持す丹波より及比高家の敗死を聞乃官軍より属へ返て京
 師を攻將士競て之より附獨高徳附を欲せと朝忠と別若狹路
 より京師より入五月諸將より従ひ六波羅を攻結城親光出降る忠頭
 金剛山を攻る賊兵の圍を解来り救けんを恐急よ之を攻伯雲の
 兵車數十輛を聯ね屋杖を積城より傳之より火城兵逃亡相踵二帥

遂に東走し近江に死す而して金剛山の圍始り解捷伯耆に至る
天皇闕し還人を議し二十三日を止し車駕名和氏を發す長年
劍を帶し其右の侍し百官戎服播磨に至り新田氏の捷報す
高時已に誅し伏すと正成乃七千騎を以兵庫に迎へ謁す天皇
親之を勞し曰今日之事皆汝が忠戦の致す所なりと正成曰く
陛下の威靈に頼ずんば臣安ぞ重圍を脱し再び天日を覩るを
得やと乃正成序して先驅せし先闕し飯り新帝を廢し復位し
ぬる是よ於て大に賊の餘黨を索詔して藤原師基を以太宰
の帥として鎮西の探題北條英時を討未だ發せざらん菊池氏大友
氏と並し使を馳て鎮西の捷を報す

菊池氏

本藤原氏其先政則なる者元寇を防て功あり其子則隆も及
び肥後菊池郡を賜り世襲す後十餘世を武時といふ今茲正
慶二年三月武時少貳貞經大友貞宗と官軍に應せんを謀
謀泄北條英時太宰府に在武時を召武時先發せんと欲し使を
少貳大友に使し期を約す貞宗依違して答へず貞經亦京師の
官軍數利を失ふを聞遂に其使を斬首を英時に送る武時大
に怒り曰吾誤り此奴輩と事を謀る奴輩在ざるも吾寧戦ふ
能はざらんやと乃百餘騎を以發す櫛田祠前を過り馬俄に前
まぐ武時曰何物の牛鬼ぞ敢て義兵を沮む顧て其命を射る

天下大に定る而して金剛山の潰兵般若寺に聚る猶數萬人正成
源定平畿兵を將て之を攻阿曾時治大佛高直二階堂貞藤
長崎高資宇都宮公綱等六十人衆を率て降る皆斬る處す獨
公綱特旨を以て罪を宥せしむ建武元年帝戰功を論賞し
正成を以て攝河の守護と爲し長年を因伯の守護と爲し正
成を檢非違使左衛門の尉に任し特し長年と並に決斷所直
一訟獄を聽斷す天下に令し兵を休し農を務めし武人領邑安
堵故の如し帝京師の復する足利氏の功と闕る飯るの日首
之を超擢す是に至ると又四大國を管せしむ尊氏故名高氏猶缺
望し陰に異心あり帝高時の邑を以て自奉し泰家の邑を以

皇子に護良を賜ひ貞直の邑を以て三位の局を賜ふ三位局 安野の
廉の女藏子俊准三局を即嬪藤原氏殊寵あり内謁漸行る時
諸皇子皆故に復す而して恒良藤原氏の生所たり又成良義
良を生意護良を害せんを欲尊氏潛に與し謀を合せ遂に之
を構へ陷る是時當て帝寢政は倦足利氏資望獨盛新田
氏を亞ぐ正成以下驅使を充るのとは是歳春北條憲法乱を作し
飯盛山に據赤橋重時伊豫に起る正成憲法を討土居得能氏重
時を討て絶よ之を平ぐ而して帝游宴自如益珍異を徵鹽治高
貞千里の馬を献じ帝出で之を觀る以て祥瑞と爲藤原藤房
諫く曰天馬平世に用無し近日賞罰信無し役繁興文臣内諛

武臣外怨而レ奸雄ヲ其間ニ窺ヒ天馬ノ出ル鳥ノ乱ル兆ニ非ズをレ知ルやと帝色ヲ變ヘ入リ勢ヲ藤房ノ驥ヲ諫シ聽レ遂ニ官ヲ舍テ遁レ去リ帝驚ケ之ヲ追ヒ及ビ二年春藤原公宗北條氏ノ餘黨ヲ結ビ陰ニ大逆ヲ謀ル名和長年等詔ヲ奉リ之ヲ誅ス夏北條時行等乱ヲ關東ニ作リ鎌倉ヲ攻メ陷ル帝尊氏ニ命シ往テ之ヲ平ゲむ尊氏遂ニ鎌倉ヲ據テ反ス帝宸怒リぬひ冬菊池武重等諸將ニ詔シ新田義貞ニ從テ東尊氏ヲ伐ムむ正成長年と京師ニ居守ス直義箱根ノ險ニ拒ル重時手兵ヲ以テ先登リ仰攻メ敵ヲ卻シ北ヲ追フ山腹ニ陣ヲ諸軍乃レ繼進シ而レ別軍竹下ヲ攻敗シ退ク大友

貞宗鹽治高貞叛シ足利氏ニ降リ諸軍崩レ潰ル武重四百騎ヲ以テ義貞ヲ扶シ西ニ赤松則村等並ニ起リ尊氏ニ應ズ帝天馬ヲ使者ニ賜ヒ義貞ヲ召還シ天馬途ニ斃ル延元元年正月尊氏直義入リ京師ヲ犯シ正成兵五千ヲ以テ宇治ヲ守リ長年源忠顯結城親光と二千ヲ以テ勢多ヲ守リ皆制ス新田氏ニ受ク新田氏先ニ大渡山崎ノ守ヲ失フ尊氏乃レ京師ニ入リ結城親光伴リ降リ尊氏ヲ刺シ欲ス成ス死シ帝戲シ山ニ幸ス正成ノ之ヲ聞キ徑ニ行キ長年一ニ宮闕ヲ視ス行キ欲シ還リ京師ニ入リ賊軍填塞シ長年十七戰シ大内ニ至レ諸殿ニ賊兵ノ為シ毀ル長年馬ヲ下リ闕ニ向テ

伏一泣之^{ひた}久^{ひさ}し終^{つひ}行在^{ゆき}赴^{おもむ}く信濃^{しんのう}人^{ひと}勅使^{てつし}河原^{かわら}某^{たれ}大渡^{おほわた}あり未^{いま}だ帝^{てい}の之^{その}所^{ところ}を知ら^しらば其^{その}二子^{ふたご}を謂^{いわ}て曰^{いは}吾^{われ}亡朝^{むすぶちやう}の臣^{おん}何顔^{なんがん}ありて逆臣^{さかむし}の事^{こと}んやと京師^{きやうし}を還^{かへ}つて羅城門^{らじやうもん}より自殺^{じそく}す

羅城門

大内裏外廓の南門は二重樓なり朱雀九条の達あり

賊宮闕を焚進んで園城

寺^{てら}を據^より以^もて叡山^{えいざん}は逼^{せま}る山徒^{さんと}英憲^{えいけん}祐覚^{ゆうかく}等^ら拒守^{きよしゆ}乃^{すなは}計^{はかり}を

贊^{すす}す祐覚^{ゆうかく}又^{また}詔^{せう}を受^う舟^{ふね}七^{なな}百^{ひゃく}艘^{そう}を以^もて湖^{うみ}は泛^{ひろ}べ北畠^{きたはたけ}氏の兵^{へい}

を迎^{むか}へて入援^{いりえん}く

北畠氏

姓源^{せいげん}具平^{きへい}親王^{しんおう}は出世^{しゅつせ}名卿^{なけい}為^なり元弘^{げんこう}の時^{とき}及^{およ}び顕家^{けんけ}あり帝位^{ていゐ}を復^{かへ}して從^ま三位^{さんゐ}參議^{さんぎ}陸奥^{りくお}守^{まも}り拜^{まが}す父親^{ちちのちか}房^{ふさ}と義良^{ぎら}親王^{しんおう}を奉^{たて}出^でて東邊^{とうへん}を鎮^{ちん}す結城^{むすき}宗廣^{むねひろ}世陸奥^{よりのりくお}に居^ゐる其^{その}子^こ親光^{ちかみつ}と先づ官軍^{くわんぐん}を敗^くす是^{こゝ}に於^おて命^{いのち}を受^う顕家^{けんけ}は副^ふみ顕家^{けんけ}年^{とし}甫^むく十七^{じゅうしち}固^こ辞^{こと}す乃^{すなは}詔^{せう}して曰^{いは}文武^{ぶぶ}岐^ぎすはるる貴戚^{きせき}軍^{ぐん}を掌^{つかさど}る古^{ふる}の制^{せい}ありと顕家^{けんけ}任^{まか}す赴^{おもむ}く東邊^{とうへん}虞^よ無^なし尋^{たづ}ね鎮守^{ちんしゆ}府^ふ將^{しやう}軍^{ぐん}を任^{まか}す帝^{てい}足利^{あしき}尊^{そん}氏^しを討^うち及^{およ}び顕家^{けんけ}を詔^{せう}し軍^{ぐん}を會^あはす顕家^{けんけ}鎌倉^{かまくら}に至^{いた}る凡^{およ}び五^ご氏^し已^やに西^{にし}す顕家^{けんけ}程^{ほど}を并^{なら}せ之^{これ}を追^お東北^{とうほく}兵^{へい}争^ありて顕家^{けんけ}は附^つす凡^{およ}び五^ご萬人^{まんにん}近江^{おんみ}に至^{いた}り六角^{むかく}氏^し頼^{たの}む観音^{くわんおん}寺^{てら}の城^{しろ}を攻^せめこれを拔^ひ斬^{ざん}首^{くび}

櫻井驛小楠
公兒小訣る

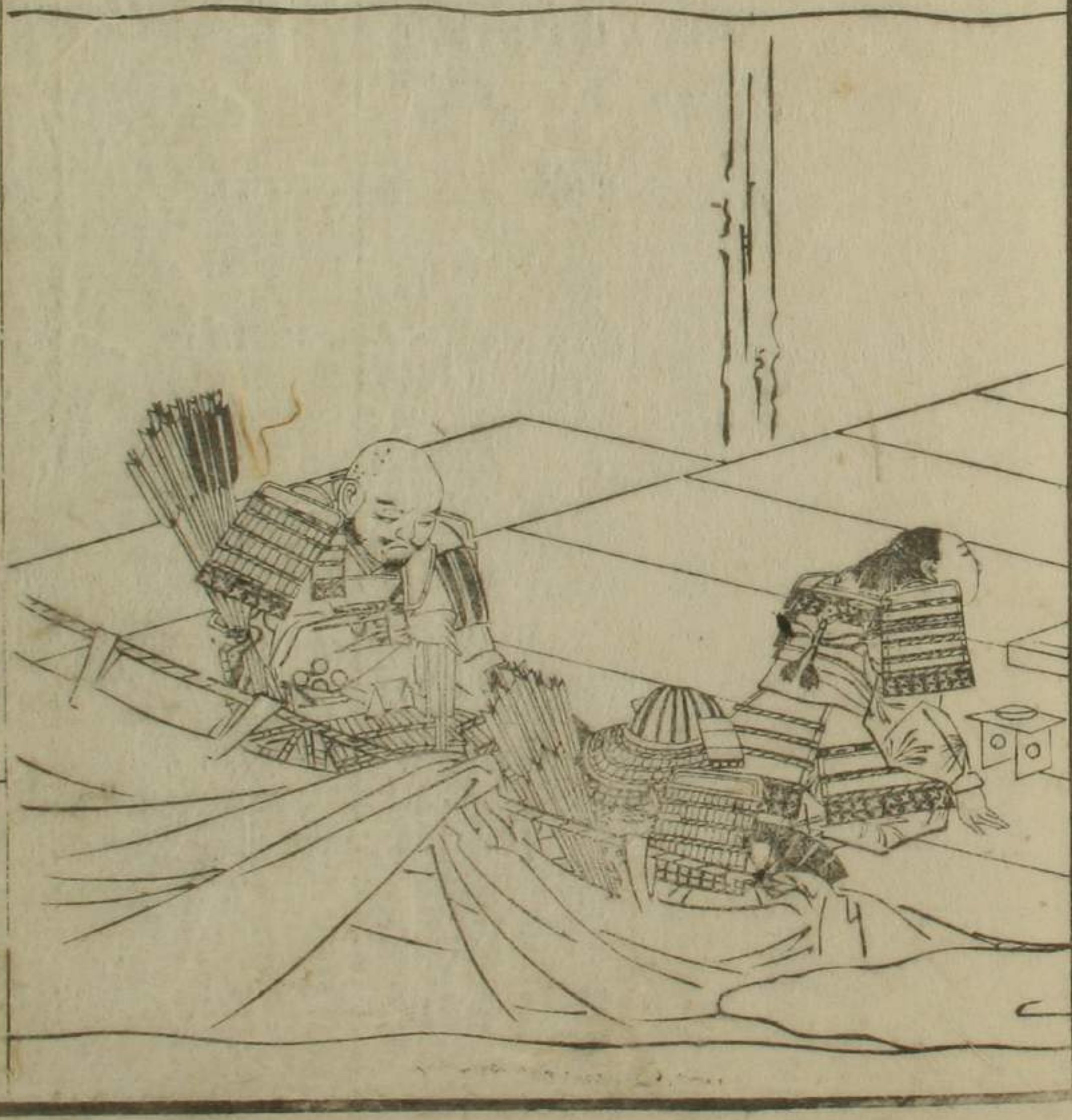
松苗

嗟呼夢賚之
良戡鯨鯢替
中興千載將
壇山斗三世
王室干城



學方

君がたえとれと
わのまきまわ
あ
あ
あ



五百級遂に叡山に至り諸將會と戦を議す或は速に之を襲ん
を欲す正成等之を然りとす即夜顯家諸將と園城寺を攻破
新田義貞遂に京師を復す而して夜賊の爲に返襲せられ敗
還る尊氏復入是時當て諸道の賊軍悉く京師に聚る凡
數十萬人而して官軍十萬に滿は諸將分て之を將復京師を
攻兵各二萬をかり正成は百騎を將る糺林に軍し火を出雲路
に縱つ尊氏上杉憲顯足利高経等をして東國の騎兵五萬を
以て來り衝擊す正成豫楯數百を造り鈕て之を駢ね自ら
蔽ひ以て射る賊卻く輒騎を縱て之に乗は賊辟易逃走す顯
家義貞遂に撃つ尊氏を走らす而して日暮義貞留つて京

中陣せんを欲す正成往て之に説く曰今日我軍克とも獲る所
少なり寡兵を以て京中よ屯し鹵掠四散盡を前日の敗に懲ざ
る敵を以て復振付し是の後力を爲し難し我且引還り銳を
養ひ再舉し敵を數百里の外に驅ん是全勝の策なりと義
貞之を然とし乃退て坂本に陣す尊氏諸軍を收復京師に
入正成素一卒善泣者をして蓄ふ且日其卒に教へ僧數人を行原
濕に物色す賊兵故を問輒泣て曰昨日之戦七將皆歿す七將義
義助 正成 顯家 將 尸を獲て葬らんとはと尊氏聞て大に喜
長年 忠 顯 氏 明 將 尸を獲て葬らんとはと尊氏聞て大に喜
で曰彼戦勝て退くにあらずなりと乃義貞正成の首を索稍肖
たる者を獲て之を梟し以て衆に示す其夜正成卒數千を遣

炬を執く北走し累々絶は尊氏の軍望見官軍其將領を喪ひ潰え去なりと謂ひ急は兵を分て四出要撃し在者復備を設きて正成諸將と兵を合して夜を發し昧爽直は尊氏の軍は薄り火を縦て鼓諜す尊氏の軍大は潰れて走り死亡大半二月尊氏直義湊川は走る官軍追撃し直義と豊島は戦ひ勝敗未だ決せし正成後れ至り遠て敵後に出直義戦へむして走る土居通治得能通言舟師と以来り援るる會賊の先鋒大友貞宗の兵を撃破り復撃して直義を走らざる尊氏終は赤松則村をしく播磨を守り免海は航して鎮西は走る「菊池武敏は武重の弟なり時は肥後はあり少貳頼尚兵を發して尊氏を迎

を聞三千人を將ぬ之を追水木渡は至れ頼尚已は濟り餘衆舟を待武敏撃て之を殲し遂は少貳貞経を内山り攻て之を斬遂は尊氏と翰濱は戦ふは叛して降る者あり武敏敗れ菊池城は飯り城尋は陷武敏逃て山中は匿る是は於て九國盡く尊氏に附尊氏の西するや正成之を窮追せんと欲義貞遷延三月は及で發し赤松則村を白旗城は攻城固りて拔は義貞の弟義助之は説て曰嚮は正成金剛山は據北條氏天下の兵を擧之を攻て克ば力を一城は竭して顧て天下を失ふ君盍を監せざる尊氏已は九國を并且東上せんとはと宣し兵を分て城を圍急は舟坂を拔以て山陽は徇ふ」と義貞乃

義助を以て舟坂を攻む舟坂の賊兵險に據て下らば初尊氏
關を犯す山陽皆之に應に獨兒嶋高德孤軍を以て福山城を
攻て克む其兵連に叛す乃三石山に逃る義助の舟坂を攻むを聞
し及び則喜間使を遣告て曰三石の南に間道あり以て舟坂の
背に出べし吾兵を熊山に起し賊を以て兵を令めん公は則
一軍間道に由て之を夾み攻は必む舟坂を拔ん舟坂拔べ西國
服せざる者無らん義助大に喜與に期を約し高德父範長
と熊山に上り倉卒族人を駭し及び兵厘に二百天明舟坂の
賊果して三十人を令ち七道來り攻高德防戦重傷し終り
奮撃して賊兵を走し以て而して義助軍を潛に賊後に出遂に

舟坂を拔一將を遣て福山に據し赤松則村使を馳尊氏に
告て曰白旗城陷ふ公衆有とてども用うる所莫らんと尊氏
乃大舉東上し水陸並進福山城陷る義助兵を引て退く菊
池武重之に殿す賊舟師陸に上り西川尻に陣す高德之を聞
義助に合せんと欲し山を踰て東すよ創劇範長之を僧寺
に託し八十餘人を以て東走し義貞已に白旗の圍を釋しあふ
赤松氏の兵三百騎範長の過るを見呼て曰敗卒盍甲を
釋て降らざるかと範長笑て曰郷向は尊氏百方我を招く我其
書を毀り火に投げ今曷ぞ汝輩に降んべと其陣を潰して出賊
敗卒過ると傳呼す土兵羣起範長悉く其兵を亡ひ餘る所の

者六人曰我族と擧て来らざるを悔と乃又伏て死す賊軍
勝と乘て進む義貞兵庫軍一書を飛して急を告ぐ朝廷震
動す時は北畠頭家已に鎮り京師兵寡一帝正成は命一
行て義貞を援けしむ正成答て曰尊氏新に九國を擧て来る
其鋒甚鋭一我疲兵を以格闘す他の奇道無一其敗必せり
今の計を為陛下復敵山は幸義貞を召還し賊を縦て京
師に入而して臣河内は飯り其糧道を絶は則賊兵日は散り我兵
日は聚らん是は於て夾て之を攻は一戦して敗るべきなり義貞の
計蓋亦此に出ん戦道へ一非を要勝は飯の願ふ朝廷再び
之を計り給はんことを諸公卿皆之を然とて獨參議藤原清忠

不可して曰賊衆盛と雖前後の如く過り王師天命あり宜しく
之をくより外は防べしと帝之は従ふ正成退て其子弟を謂て
曰事已に此に至る何ぞ必む議を抗せんと五月十六日弟正季子
正行等と關を辞して西に櫻井驛に至る正行時年十一正成
之を河内は遣飯一誠一免て曰汝幼といくとも已に十歳は過ぐ
能吾言を記せよ今日の役天下安危の決する所意ふは吾復
汝を見下吾已に戦死するを聞て天下盡く足利氏は飯する
を知る處一慎や禍福を計り較ぶる利は向ひ義を忘れ以て
乃父の忠を廢すること勿れ苟我の族隸を一人も存す
る者有らば則率お以て金剛山の舊址を守り身を以て國に

死す有て他無らん汝我を報ゆる所此より大なる莫と
因て帝の嘗て賜ふ所の寶刀を以て之を授けて訣別す正行
其死を從んを請正成之を叱して起つ正行涙を揮て去正成乃
兵庫に至り義貞を慰勉し訣飲終夜是時當て尊氏水軍
を將お直義陸軍五十萬を將う正成手兵七百を率湊川に
陣し以て之に當る義貞三萬騎を以和田崎に陣し以て水軍を
扞ぐ水軍の先鋒過て東す義貞軍を抜て之を循ふ而敵軍和
田崎に上る正成顧て正季を謂て曰我腹背敵を受遁るべし
以先前なる者を破り後背者は接せし如何正季曰然と兄弟
並突て陸軍に入り七離七遭し直義を獲んと欲す直義の馬

傷て墜我兵及し垂し一敵將あり遮鬪し之を逸す尊氏
亦兵を分て来り援け我軍後を包む正成兄弟馬を回して之に
當り血戦十六合盡く其騎を亡ひ餘所七十三騎猶以圍を潰
すべし而して正成生るを欲せば乃走て湊川の北なる民舎に入
坐して鎧を釋は身十一創を被ふる顧て正季を謂て曰死して
何をも為ん曰く人間は七生して以て國賊を殺ん正成欣然と
しして曰是吾心を獲たりと耦刺して死す正成年四十三宗族十
六人從士五十餘人悉く之に死す菊地武重義貞の軍は河
第武朝を率湊川の戰場を来り視せし正成且に死んとする
の會ひ去り忍びて亦之に死す義貞敗れ退く尊氏京師に入

正成の首を河内カウチに送る一家聚哭す正行起て室ムロに入其母尾
 して闕クハへ則父の授る所の刀を執て將サキに自殺せんとす母徑チカに
 入刀を奪ひ泣いて曰汝何ぞ惑へる乃父の汝を遣ヤリ候す豈汝アナタは自
 殺せしむらんや汝遺命を啣ウケて取り来て我に告而して先
 之を忘る忍んぞ能王事オウジに任んと正行大に悟り是より國
 賊を討父讐言を復ウケせんと志ココロと為常トコに兒童と嬉戲馳遂
 の状を為て曰足利氏を追なり斬首の状を為曰尊氏の元
 を獲るなりと楠氏の族黨多く湊川に死なるとも河内紀
 伊の間猶義故を存する者あり皆正行を戴せんを思ふ是
 時トキに當て天子賊を敵山に避け名和菊地土居得能氏皆義

貞マコトは從て扞禦ケンゴし源忠顯戰没し官軍遂スに出て京師を攻
 路人名和長年を指て曰正成忠顯等既サに死獨り此人ありと
 戰ふ及て大に敗れ長年退て大宮巷ミヤノカウに至り二百人と力戰
 して死す冬尊氏佯降り帝ミカドに闕クハを還カヘらんを請菊池武重
 等之ノに從ふ皇子宗良遠江に走り懷良大和に走る義貞
 詔ミコトノコトを以て皇太子恒良及ツひ尊良親王を奉ホウり北國キタノクニに之土居
 通治得能通言等之ノに從ふ通言族通繩ツナヒと殿テンし大雪オホユキに會アひ
 塩津シホヅに至迷ふと道を失し適賊兵シタクサヒに値ふ將士凍飢し兵を操
 能ノは三百人皆刀を地チに植ウエ之ニ伏フシ自ら貫スて死す通治諸將
 と金崎の城を守り城陥り力戰して自殺す尊良薨太子

虜せらるゝ京師に入帝の闕を還りて尊氏已に新帝の
弟を擁立し是を北朝光明帝と申奉る帝は神器を傳へ
請ふ聽しぬを尊氏帝を花山院に内從行者を殺し或は拘
執し獨三條景繁侍するを得乃潛り計を進免逃て大和に
幸せんとして帝夜婦人の衣を服し壞牆より出扶て馬に上奉
景繁神器を荷ふて從ふ曉る比穴生に達す景繁を遣り
吉野の僧宗信に諭す宗信は嘗て將軍獲良を助る者也
衆は先立ち來り迎ふ正行聞て大に喜び從弟和田正朝等と
馳て之に赴き駕を獲し吉野に入河内紀伊の將士相踵て
來り衛る官軍復振ふ帝正成の王事に死するを思正三位

左近衛中將を追贈し正行を正四位下叙し帶刀とし
遂に父の官を襲ひ檢非違使左衛門尉に任し河内守を兼
是に於て行宮を吉野に建四方に號令す是より先菊地武
重帝は從て拘せらる守者の懈りを候ひ逃飯て菊地に據る
帝因て皇子懷良を拜し征西將軍と菊池に赴くむ大館
氏明亦逃れて伊豫に如土居通治の子備前守通郷得能通言
の子彈正迎て兵を起す北畠顯家の弟顯信亦兵を伊勢に起
而して顯家國內の叛者を討靈山に據明年秋顯家入て行在
を援んと欲し結城宗廣等の兵を得義良親王を奉り白河
関に軍す來り属する兵數萬人進て尊氏の子義詮と利根

川は相拒ぐ齋藤實永流を乱し先渡る全軍之に繼水西岸
激す賊兵漂溺し敗れ走る顕家北るを追て義詮を鎌倉
攻又之を走らす三年春宗良親王と兵を合し偕し京師を赴
賊兵大に起り後を擁す顕家回て雲津川に戦ひ之を破り南
都に至る結城廣宗曰敵を行宮を避るる賊を玉城に攘ふ
若くは顕家之に従ふ賊兵逆撃に逢ひ敗れ走り乃西親王を
し行宮を赴く先自ら敗兵を聚て安倍野に軍す五月高
師直来り襲ふ顕家二十餘騎と圍を衝て死名和義高之
死宗廣走て吉野に皈る師直遂に顕信を男山に圍顕信善
拒ぎ出撃て利ありは賊火を縱て城に登る城兵撃く之を

走らす已く糧盡圍を潰し河内を走る帝初廷臣をく
兵を將て顕信を救けり又北國の將士に詔し之を援けむ
義貞驟赴き援んと欲す兒嶋高德從て軍中よりあり説て
曰前日之敗賊我糧道を絶も以てたり今數千人を遣て叡山に
據糧を北陸に取時に出て京師を擾る是根を深し葉を
固くするの策なり請書を山徒に貽ふん乃之に従ふ山徒之を
肯す義貞義助を遣之に赴く山男山の火を望て逡巡して去
尋て義貞戦死す結城宗廣東邊の兵を收んと請帝宗良
親王を先登して遠江に至て之を待り顕信を以て兄の官
職を襲ひ親房及び宗廣と義良親王を奉り海路任に赴く

颯々天龍洋に遇舟四散一親房常陸に抵り宗廣安濃津に
 至る顯信親王と篠島に抵る宗廣病で死す四年三月顯信親
 王を奉り吉野に皈る是より先皇太子及び成良親王皆尊氏
 に鳩殺せらるる乃義良を立て皇太子とす八月帝疾を獲ぬ
 大漸なり乃遺詔して曰朕國賊を滅し天下を平めさせざるを
 憾む骨は此に埋むとも魂魄常に北闕を望む後人其朕が志を
 躰し力を竭し賊を討不者は吾子孫に非む吾臣属は皆死す
 と劍を按し崩れぬ已む群臣氣沮と逃散せん欲す
 僧宗信力言し之を止む又正行正朝と兵二千を率ゐ来り衛
 衆情大に安んず是に於て相與太子を奉り神器を拜し位

二即ち是を村上天皇と申奉る先帝の遺詔を四方に頒じ
 興國元年春土居通郷得能彈正等奏し一將帥を得んと請
 新田義助戰敗兒嶋高德等と吉野に詣り會因て義助に
 詔し伊豫に赴む幾やしく病で死す高德等逃て備前
 に皈る五月賊將細川頼春来り河江を攻通郷彈正金谷經氏を
 將り舟師赴き救ふ賊は海上に値ひ戦て利あり以轉て韃
 城を攻取之に據り賊を拒ぐ十餘日頼春が河江を陥れ將に
 世田を攻んとすを聞經氏を勧て之を救ふ死士三百を選り
 發し賊七千と千町原に戦ひ盡く其卒を亡ふ經氏等十七騎
 と圍を潰し備後を走る是より西南官軍振付け是歳北畠

顯信白河に居り親房小田に居る賊將高師冬大兵を以て
 攻親房援を結城親朝に請ふ親朝を宗廣の子なり宗
 廣死に臨んば賊を討て遺言す而して親朝歎を尊氏に送
 故を以て頼援けに數月城將出降る親房走て関城を保つ
 賊二城間に陣す父子數出力戦す而して城且に陥んとす親
 房間使顯信を告親朝の子弟を率ゐ來り救ふ親朝之を
 擁して遣はし四年春親房手書して切諭す親朝聽ば遂に
 賊に降る親房走て吉野に皈る是より東北官軍振む顯信
 留て陸奥に居正行金剛山に在て漸々義故を保駁し時兵を
 攝津より出火を縱て賊に挑む正平二年秋尊氏細川顯信を

て三千騎を將ゐ來り攻む未金剛山に至る七里はて止舎
 正行の且に箭尾城を攻んとすを聞山を離るを俟て其後を
 絶んとす正行謀知り七百人を以て行聚落に火し箭尾に向ふ
 為して還て譽田の林に伏敵起るを望輒山下に趨隊を乱
 て疾馳林を過伏起るを遇て大に駛り敗走し退て天王寺
 を守る山名時氏六千騎を以て來り援け住吉に軍す正行曰先
 時氏を破らば顯氏戦はざるを走らんと兵二千を分て五隊とし
 進で住吉に向ふ時氏兵を分て之に當る正行北軍の塵起るを
 視て曰敵四処に陣し而して衆我に倍す我兵を分ばるるは
 と乃五隊を合して一にして疾行て時氏の麾下を撃時氏創を

正行まさゆき乃なり破やぶ野山のやま名な
細川ほそがわ乃なり破やぶ軍ぐんを破やぶる

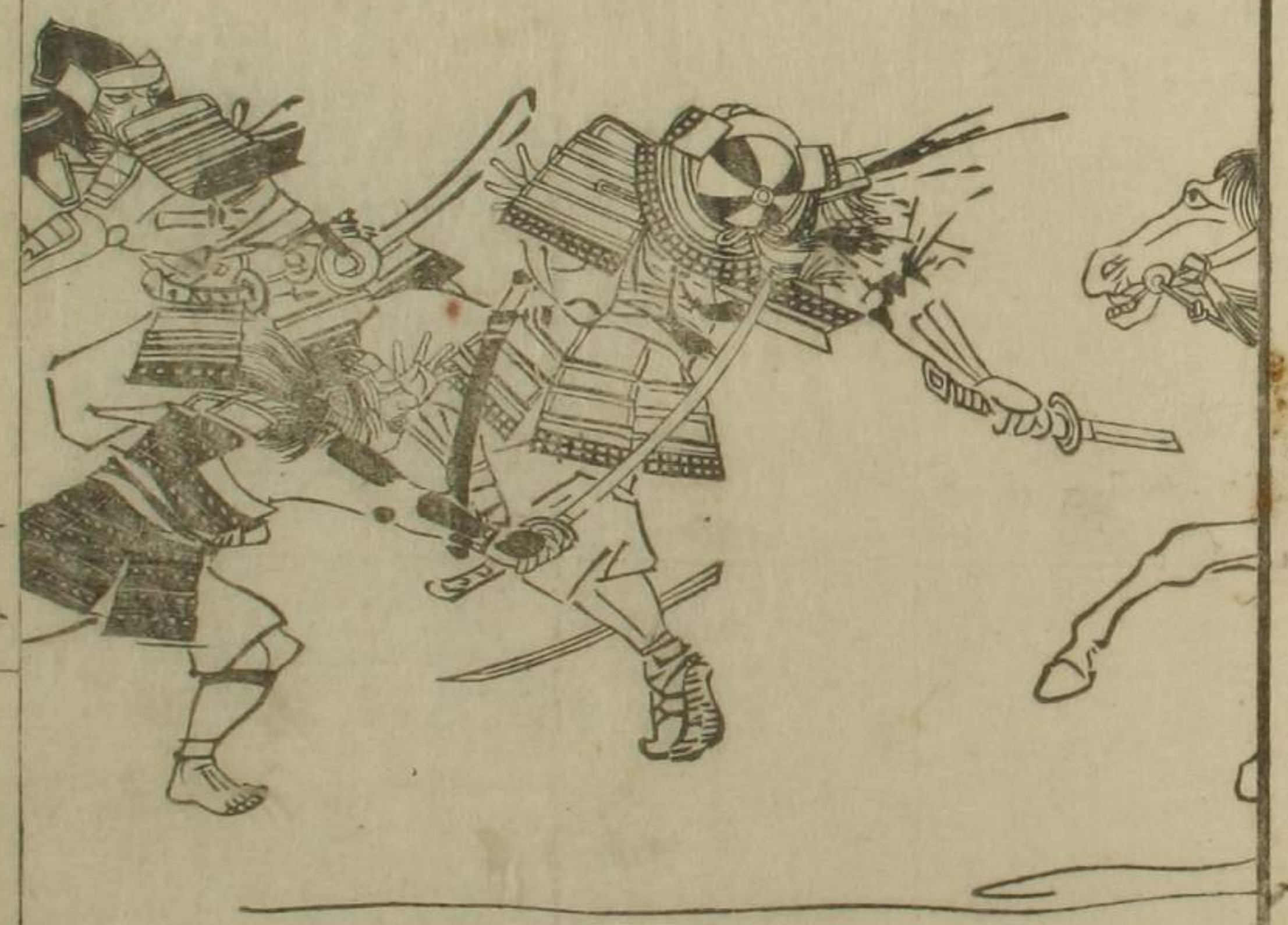


竹堂曰

嗚呼正成歿義貞死而
足利氏之威始偏天下
於此時正行以小壯之
身擁千百之兵再破北
軍而一振南朝就衰之
氣所以基数十年偏安
之業者豈非其力哉

三積

あゝ浪ときくたよ
うねをもちた神ふ
かゝりて志あけ
わゝりのよき



被り走て頭氏に敗す頭氏の軍乱走る渡部を過て溺る者
 無數京畿震駭す正行溺卒五百人を援け衣甲を與へ礼
 して遣る留り仕人を願ふ者多し正行遂に進て京師に逼
 尊氏大に懼れ乃二十餘州の兵を發し高師直を以て諸將
 帥を紡以て南正行を撃つ正行弟正時と宗族を率お行宮に
 詣り中納言藤原隆資に因て上言して曰先臣正成嘗て微
 力を以て強賊を挫き先帝の宸憂を安んじ奉り天下再
 乱逆賊四襲するに及て命を湊川に致す臣時年十一命じて
 河内に敗れり餘燼を收合して國讐を報復せんことを属す
 臣年已に壯而ども稟性羸弱常々念ふ今に及て力戦せば無

虞の疾に罹らば上不忠の臣となり下不孝の子となりん今賊
 の渠帥大舉し来り犯す是真に臣が命を致の秋なり臣彼
 が首を獲よ非んべ臣が首を彼に授ん臣が生死今日に決す切に
 希ふ一たび天顔を拜し行を得んと隆資入奏す帝簾を
 掲げ將士を臨視しめひ正行を前め之を勞し曰曩日乃
 両捷大に賊勢を殺ぎ甚朕が心を慰す朕深く汝が世忠を
 嘉す今賊銳を悉く来真に安危の決然とも兵の進退宜
 しく従ふを貴ぶ朕汝を以て股肱とす汝其自愛せよと正行俯
 伏涙を垂て出て後醍醐帝の厠に辞決し族黨百四十三人
 の姓名を厠壁に題して途に上る帝隆資をして之を援しむ

明年正月北軍四條畷に至りて五隊とし四隊前より在左右相向ふ
師直へ中軍ありて遙より其後より居る兵凡八萬騎正行隆資を
して賊の前軍を綴りて自ら三千騎を將り直り其中軍を指賊
の前隊馳て之を遮る正行先鋒を以て撃破て過賊隊又至り
我後軍と戦ふ我後軍敗走す正行顧りて三百騎を以直り
前より賊將細川清氏仁木頼章等更進を遮鬪す正行盡く之
を破り其騎を聚むるも馬皆重傷す乃馬を舍隴に踞りて餉す
賊衆環視し敢て迫らば其走路を開て皆中軍に合す正行餉
畢起て衆を謂て曰必師直と死を決せん進て其中堅を衝
我兵殊死戦し一以て百に當らざる無し賊軍披靡す正行進で

師直は逼る師直の臣偽りて師直と称して死す正行大に喜び首を
空に抛て手兼るもの三つ軍士其實を告る者あり正行首を
地に投蹴且罵り曰嗟汝亦無双の國賊但其勇喜すべしと首を
隴上に置いて復進す師直を索其幟を望見之を追んと欲す
正朝曰彼騎我歩及ぶべし原伴り走て之を誘あは若むと乃
殘兵五十餘人と楯を負て以て北より師直敢て追ら其裨將を
して數百騎を以て之を尾撃せしむ正行大呼して返戦走るを追
て師直は逼る相距數歩而して我兵晨より晡に至り三十餘合
力索して能起莫し正行目を師直に注衆を勉て前進す敵之
を連射す正行身箭を被る蟪の如し乃呼て曰已んかな賊

獲るをも為勿れと正時と相刺北向と斃年二十二餘兵皆自
 刃と駢び斃和田賢秀正朝の弟なり獨敵平混師直
 を伺撃す成すして死す正朝還る状を奏せんと欲す一賊あり
 呼で曰獨亡るも忍んやと正朝笑之返す賊乃走る賊數騎
 至正朝遂に死す是に於て百四十三人悉く之に死す賊軍進で
 行宮を犯す帝逃て穴生入る勢め賊火を縦て之を索む正
 成の弟左衛門尉正儀兵を石川に出し高師泰と相持師直敢
 て深く入る兵を引て去四年畠山國清來り師泰に代正儀益
 堅守す五年足利直義尊氏と隙あり乃來り降る朝議納て
 大將とす國清等之に附六年正儀詔し直義を助け尊氏

を京師に撃之を走らす已りて直義叛去遂に關東に走る
 尊氏往て之を撃んと欲す而も楠氏の後を窺んと恐れ子の
 義詮を許し伴降る帝に請闕を假し帝其情を知り亦
 伴て之を許す尊氏乃東す七年正月正儀族和田正忠等と
 兵七千を將る乘輿を奉りて男山に軍す兒島高德時髪
 を削り來り吉野にあり密詔を奉り往て東北の諸將を促す
 宗良親王を征東將軍とす並來援けむ北畠顯能顯信の
 弟なり伊勢の守為り兵數千を舉先來り援く鳥羽より入り
 正儀正忠五千人を將る夜桂川を渉り大宮に至る黎明賊將細
 川顯氏來り迎我兵圍撃其從子八郎を斬細川賴春繼至り巷

戦す正儀楯を接して梯を屋に升て下射す賊兵卻く騎を縦
 て之に乗す頼春馬驚て墮正忠の兵槍刺く之を殺す義詮
 遂に近江は走る帝人をもと北朝の三帝を取て軍中を置は
 是時は當て將軍宗良新田氏の族を率ゐ尊氏を武藏に擊
 て利あり義詮兵三萬を得返て東山に陣す頭能三たび其
 陣を退く賊軍進んで男山を攻帝正儀正忠等を召拒戦せむ
 正忠年十六入奏して曰建武以来臣が族類大半此賊に殺せり
 今日の戦公の國賊を討私の家仇を復す其一將を斬らん
 復還り謁せりと正儀と兵三千を合荒坂に據細川清氏
 土岐康貞六千騎を以て仰ぎ攻康貞驍名あり衆先に進む

正忠薙刀を揮て之を斬り還り謁す遂に正儀と更科と拒ぐ利あり
 ら左兵衛督藤原康長夜襲て賊營を敗る而して賊男山を
 圍む益密正儀正忠詔を受河内は還り兵を聚て交て攻會正
 忠疾作て暴卒す正儀未だ発せば賊急に行在を犯す帝
 甲を擲り馬上に圍を潰し南走し賊兵之を追ふ甚だ急
 なる藤原隆資以下三百餘人之死す箭御鎧及ぶ藤原康
 長力戦一言野は連すを得たり而して神鏡を路に遺す名
 和長生之を收て還る將軍宗良及び新田桃井氏東北より
 土居得能氏西南より並入て援く男山陷るを聞て皆還る是
 役は賊將山名時氏功有て賞無し怒て来り降る足利直冬亦

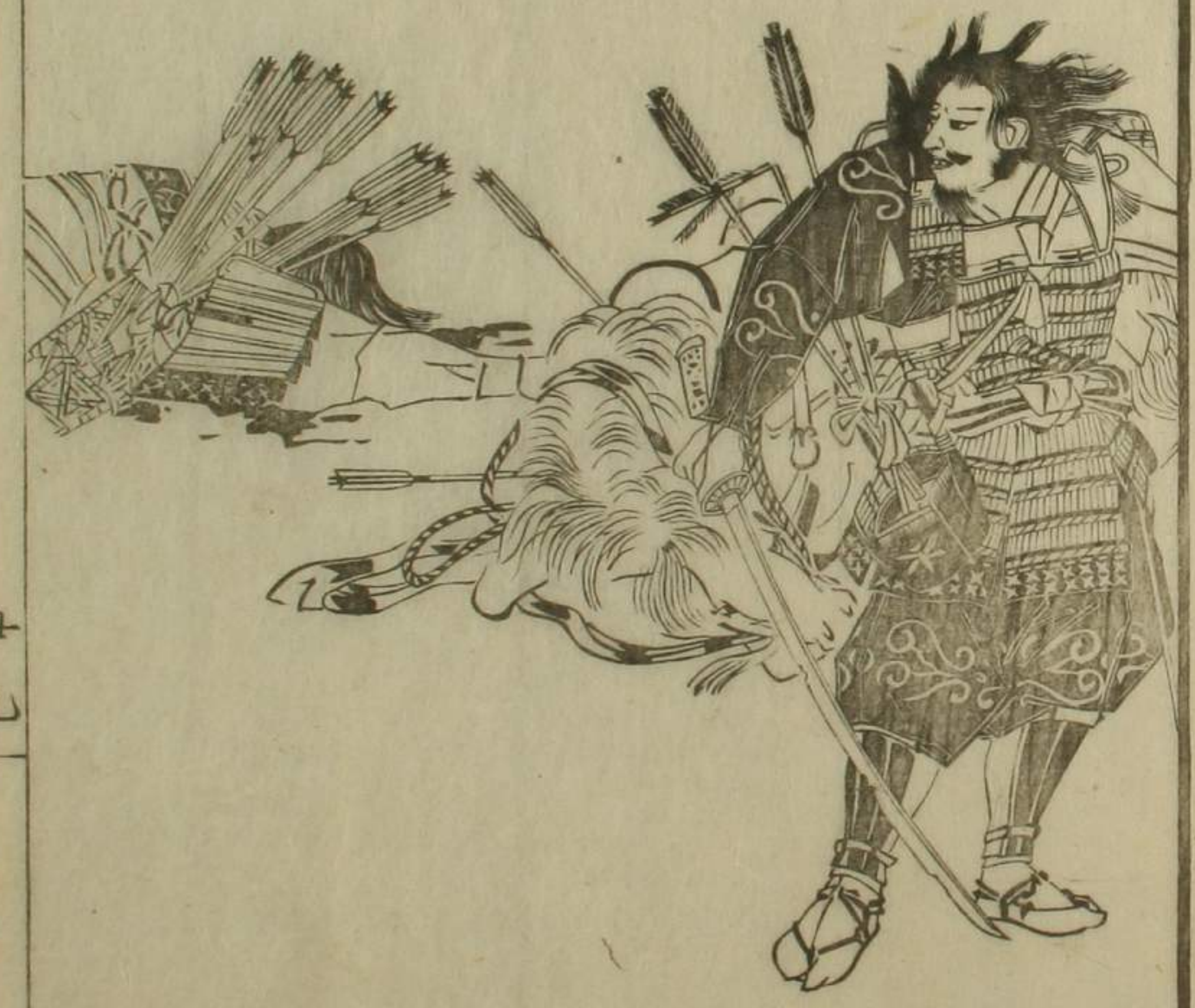
降り京師を攻んと請詔し諸將をて助け攻む十一月正儀等
 賊將佐々木秀綱を渡部を撃つ之を敗る八年六月諸軍京師
 を改正儀方手五百を以て戦を挑時氏之に継ぐ遂に撃つ義
 詮を走らす時氏等兵寡を以て引還る十年直冬時氏復兵
 を発し尊氏を撃つ之を走らす正儀時氏義詮と播磨に戦ひ
 糧益て引還る是歳將軍宗良仁科足助の諸族と兵を起す
 應ずる者少く北畠顯信結城氏を攻れ走て吉野に返り遂に
 西走して菊地武光に依る武光亦武重の弟なり武重死する
 と及嗣で其衆を紛屢賊黨大友少貳氏を討つ十三年武光一
 色直氏を筑前に討つ大よ之を克大友氏時少貳頼尚寺以旨武

光に降る時は尊氏已に死し義詮兵を遣て氏時頼尚を助け
 武光を撃つ武光方畠山國久を日向に討つ氏時高崎に據
 て其馭途を絶武光顧を進て國久を攻之を走じ乃還る氏
 時敢て要撃せむ十四年頼尚兵六萬を以て攻武光八千
 人を發し將軍懷良を奉り筑後川を交て陣を武光銳兵
 を以て先づ渡る頼尚卻て大原を保つ武光夜に子武政等と
 遣兵を潛河水に因て軍聲を乱し襲ふ頼尚の二子を
 獲因て大に戦懷良創を被り北畠顯信等之に死す武光身士
 卒に先づ馬傷胄裂一敵將を斬り其馬と胄を奪ひ復
 進む竟に大よ之を破る西南の官軍復振ふ賊將畠山國清

菊池武光筑後
川小奮戦す

松根

あのみもとまよふの
うめ海いで
よきとほ法一は
まゝこれひらぬ



建議一^大舉して楠氏を滅し官軍の根本を奪んとす正儀和泉
守和田正武と行宮を詣り奏して曰國清関東の甲を擧げ小京
師に至り聞而して臣其能為莫と知り兵道三あり曰天時地理
人和より明歳大將軍星西に在而彼東より来る天時違り
我居る所山を負河を帶形勢深沮千窟の圍に論母く爾後敵五
来皆敗る地理違り國清公を借て私を營築衛は嫉り人
和違り三者皆違ふ百萬有と雖何とる能為人請徒て金剛山に
御しぬる臣等石川に拒ぎ別將をして龍門に出時は輕兵を出し
出沒散合敵をして我在所を知りしは東兵慄悍氣屈して退ん
退る即之を追必大に克ん帝之に従はせぬ明年春正儀等平

岩筋尾龍泉の三城を修し樓堞を増し形勢を張自赤坂に居る
義詮國清兵三十萬を令入犯筒山に軍して楠氏に逼り一軍
を以龍門より入大納言藤原隆俊撃つ之を克賊兵を更に来り攻
隆俊大に敗走と帝將軍興良を遣つ之を援く興良叛て義詮
に應じ行宮を燒く銀嵩は據帝前関白藤原師基として討つぬ
之を走ると龍泉の城將疑兵を措て退く賊敢て迫るは五十餘日
よ及攻て之を取り遂は平岩箭尾を陷る軍を令て赤坂を圍む
正儀退る金剛山を守ると欲す正武曰子彼鼠を知るぬ人を見むば
則竄る世人笑く曰ん南人天下に抗て而も鼠鬪の何と一戦
て賊鋒を挫せざる然後退未だ晩るも也と乃三百人を選り暗號を

約し夜に出て結城氏の營を斫り大戦し克むる入り衆を唱へて坐せしむ四敵卒の難あり捕て之を斬乃退て金剛山に入る賊軍引還る正儀正武出で渡部橋を絶譽田城を攻國清復来り攻又退て山入會國清仁木義長と相惡賊中大騷我兵争起國清東飯も正儀水速城を攻て之を拔官軍勝り乘りて連諸城を下す義長来り降る帝北往吉幸り以征東將軍宗良詔兵を發し入援む岐蘇早雪を以て果る十五年征西將軍懷良菊地武光と兵三千と以宰府に出少貳頼尚大友氏時松浦黨と謀り武光と夾攻武光反間を縱り因て松浦の軍を襲て之を敗る頼尚等亦走る去歳の後賊將赤松光範功あり而佐々木道譽之を譖

其攝津の守護と奪國人憤怨す正儀正武之を伺知り九月兵五百と以天神林に軍す佐々木秀詮弟氏詮と千餘騎を以神崎橋を渡正儀等人とて行呼り曰南軍西より来と秀詮馬を回し西嚮し田小徑に單列し行正儀輕卒三百を遣り夾て之を射賊兵徑を争て還らんす正儀正武薄り撃て之を走らし秀詮氏詮を斬る水は溺る者二百餘人正儀之を援け衣を給り遣り飯す細川清氏亦道譽と惡し遂に来り降る奏して曰義詮の兵西山名時氏を拒ぎ東仁木義長を拒臣請虚に乗し京師を復さん帝之を正儀に諮給對て曰王師嘗て京師を攻五得して五失と今苟之を得と欲い臣一人の力辨むべし何ぞ清氏を假ん獨り復之を失らんを病のそと而して

行宮の君臣皆故都を戀遂に正儀と清氏ととして共々京師を攻
しむ義詮戦はして走未だ幾あらず義長敗れ時氏退く而義
詮の軍振ふ行宮を犯し我軍後を絶んと欲我軍京師に留る二十
六日中して還る清氏讚岐に戦死し四國悉叛く正儀正武議て曰
近日の勢坐視をば一戦を以諸國の官軍の氣を振るべき
也と八月騎八百土兵数千を以て神崎株瀬の二處に軍を賊兵を
分ち水と阻て拒ぐ正儀等篝火を其營に張兵を潜て三國の
渡を涉り遠て賊背に出現北軍の来り援と謂ふ天明顧視すん
ば其旗皆菊水菊水へ楠氏の號あり乃大に驚潰去正儀正武進で
赤松氏の一城を拔兵庫に火を還る是は於て北畠顯能仁木義

長と並に伊勢を略し菊地武光筑紫を略し義詮足利氏經を
遣て鎮西の探題に充武光弟武義族城重經とて兵を將とし
逆く之を撃しむ武義傷き走重經更り進少貳頼資を斬武光
繼至り豊後府に軍し撃て氏經を走る十九年大内弘世防長
と以叛く義詮は降厚東氏の邑を并し厚東怒り武光より
降り弘世と豊後を戦ひ之を走らば弘世武光病を卒す
子武政肥後守を襲ふ山名時氏仁木義長亦義詮を降る
官軍振るとして二十三年天皇崩しぬる皇太子寛成位に即ぬ
是を長慶天皇と申奉る建徳二年賊將細川頼之大舉して
入寇す和田正武楠氏の旗を率ゐ堅く諸城を守賊兵引還る

文中二年細川氏春復入寇す大納言藤原隆俊之ヲ死と天皇
 位と皇太弟熙成ヲ讓る是を後龜山天皇と申奉る天皇幼
 わして聰敏よしよしと人興復を冀ふ而して楠氏衰國勢日小
 削る義詮既死し子義滿嗣ぎ勢ひ益張る我將士多く叛き
 北朝不降る紀伊の諸城陷る三年關東の賊兵屢征東將軍宗
 良を信濃に攻宗良拒つて能く走て吉野に飯東北官軍無し征西
 將軍懷良猶菊池氏に依て一隅を保守す是より先明主朱元璋使
 を使し征西府に來る其書辭無禮なるを以て卻て納まぬ明主更
 書を北朝に貽る之を納征西府其往來を梗とするを以て今川貞
 世を遣りて探題に充來り攻菊池武政其子武朝と相繼ぎ拒ぎ

戰ひ屢之ヲ克己しして懷良武政武朝前後皆病で卒す西南
 復官軍無し天授四年山名氏清等とて入寇せしむ楠氏族
 橋本正時神宮正種等力拒克むして退く六年和田正武病で
 卒す弘和二年正儀亦卒す是時當て官軍保つ所獨り金
 剛山一城の元中九年義滿畠山義深とて數千騎を將ぬ
 來る金剛山を攻り免糧道を四絶す城兵僅に數十人飢て戰ふ
 能くも賊急に薄る城兵逃走して十津川に匿る正成城を築
 してより凡六十年乃賊兵に陷る義滿乃大内義弘を以て來て
 和議を講せしむ約して神器を北朝に傳則西紛更むと立ん
 と遂に之を許す是年冬法駕を備へ吉野を發し大覺寺に御

父子の礼を以神器を後小松帝に授けし後七年義弘兵を和泉に揚ぐ足利氏を撃つ楠正秀兵百餘を以て之に属す正秀は正儀の子也菊地氏北畠氏の餘孽又来属す戰敗散飯後十三年後小松帝崩る後龜山の皇子當に立せしむる足利氏後小松の皇子を立是と称光帝と申奉楠氏及北畠氏並之を訴へ約のどとくせんを欲す足利氏聽む並兵を起し足利氏約す帝の後當に南朝の皇子を傳ふべしと乃兵を止む称光帝崩るひく嗣おもりは足利氏後北朝の皇族を索て之を立後龜山天皇の皇子小倉王京師より伊勢を走り北畠氏に依兵を起すと戦ひ破る和を講し京師を飯り髪を削り萬壽寺に入り又

後小松帝

四十三

十餘年歳癸亥足利氏内乱あり楠二郎南國の兵を收め三百人を得萬壽寺の金藏主なる者を奉りて主と為兵を分る二隊とて二郎自ら一隊を將る越智某一隊を將る夜大内お入て三神器を取内侍鏡は東門の衛士に奪りて寶劍を清水寺の側遺し獨神璽を擁して叡山の中堂に據足利氏の管領管領 執權職なり後世ふり家老のこころかり尊氏義詮の時ふ之を執事職といふ義滿の時より管領といふ畠山基國兵を遣來り攻二郎越智と皆戰死し金藏主自殺す殘兵神璽を以て後醍醐帝の曾孫某を奉り吉野を保つ歳戊寅赤松氏の遺臣二人詐て來り仕へ皇曾孫を弑す從者追て二人を殺す其一人遂に璽を奪りて去是より先後村上天皇の皇子泰成圓

後醍醐帝

四十四

胤を生圓滿院の僧正と為髪を蓄へ名を義有と更め癸亥の難あり楠二郎の弟某義有を奉一兵を起して八幡小據の畠山氏の兵を迎撃て大之を破る細川氏来り攻楠氏利ありを退て紀伊入り湯浅の城を據歳丙寅畠山氏の將游佐来り攻楠氏又撃て之を破る丁卯冬游佐復兵を聚り来り攻城終に陥り義有害に遇楠某之に死す楠氏の事此に終る復觀る所無

名和兒島土居得能氏益楠氏先て亡ぶ楠氏後存する者菊地氏北畠氏なり而して菊地氏数世義宗なる者に至て亡ぶ北畠氏十餘世具教なる者に至て亡ぶ此二氏

楠氏衰くより皆足利氏に降る或は信長楠正儀も亦降ると益深謀有るを以て史乘散佚して信を考ふべき之を要する小正成宗族後醍醐皇統と終始を相成す楠氏亡びて後二百餘年權中納言源光圀石を湊川に立題して嗚呼忠臣楠氏の墓とりふ

史學童觀抄卷五終

史學童蒙抄

卷五

四十五

